

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

| | |
|------------|------------------|
| 2024年6月23日 | |
| 所属部局・学年 | 野生動物研究センター 修士1年生 |
| 氏名 | 島 遼 |

| |
|---|
| 1. 派遣国・場所 (○○国、○○地域) |
| 日本モンキーセンター(愛知県犬山市) |
| 2. 研究課題名 (○○の調査、および○○での実験) |
| 動物園科学実習 |
| 3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで) |
| 2024年6月14日 ~ 2024年6月16日 (3日間) |
| 4. 主な受入機関及び受入研究者 (○○大学○○研究所、○○博士/○○動物園、キュレーター、○○氏) |
| 日本モンキーセンター、新宅勇太(キュレーター、WRC 特定准教授) |
| 5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果:長さ自由) |
| 写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。 |
| <p>今回の実習では、動物園の役割や研究について学んだ。初日の授業では、動物園は博物館施設であること、その役割として「保存管理」「資料の収集」「調査研究」「展示教育」これに加えて「レクリエーション」が存在することを学び、これらの役割を3日間で網羅的に体験した。</p> <p>観察実習ではJMCでこれまで行われてきた研究のお話を聞き、自分たちでも多種間比較研究を行った。私の班は耳の形に着目し、生息場所の見通しが悪いほど音声コミュニケーションが多くなり耳も大きくなるのではないかという仮説を立て、アビシニアンコロブス、アヌビスヒヒ、クロテナガザル、ワオキツネザルの観察を行った。結果は樹上性のコロブスがほぼ鳴かず、岩場に暮らすヒヒの音声コミュニケーションが多いという仮説とは異なる結果となった。また、ワオキツネザルは顔の割に耳が大きい、これは小さな声で音声コミュニケーションをすることに加えて、熱帯もしくはサバナ気候という生息地の環境が影響しているのではないかと考えられる。また、ワオキツネザルについて、他のサルや人の声には反応せずカラスなどの鳥の声にのみ反応したことが、野生下でのワオキツネザルの天敵が猛禽類であることと関連しているのではないかと、という発見をして非常に面白いと感じた。動物園の個体にも野生由来の行動が見られ、それが生息地や天敵などの生態と結びつくことはまさに動物園が「自然への窓」であることを示しているだろう。</p> |
|  |
| 写真1: ワオキツネザルの耳。顔に対してサイズが大きく内側も外側も毛に覆われている |

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

博物館資料に関する実習ではまずヤクザル死亡個体の解剖を見学し、その後ボンネットモンキーの骨格を部位別に分ける作業を行った。まずJMCでは研究のために亡くなった全飼育個体を標本にしていると知って驚いた。ヤクザルの解体は毛皮や顔がついているときは目を背けてしまう場面が多かったが、骨と筋肉だけになると生物学的な面白さが勝るのが不思議な感覚だった。最初は同じに見えた手足の骨も対になるものがあったり、骨の欠損や傷から生前の個体の病気が判明したりと興味深い作業だった。



写真2: ボンネットモンキーの骨格を部位別に並べた

飼育実習では、ゴリラの飼育場の掃除、バーバリーマカクの餌を隠す作業、ポトの餌やりを行った。飼育場の掃除は体力が要るものであり、短時間でテキパキと済ませる飼育員さんを見て改めて尊敬した。食事を用意する場面では、動物たちができるだけ長時間頭を使って採食できるようフィーダーの使用や生き餌を与えるなど工夫を行った。しかしゴリラなど好き嫌いの激しい生き物も多く、その個体にあった食事を用意することの難しさ、個体を深く知ることの大切さも学んだ。

また、飼育展示の実習の一環として来園者調査も行った。展示を向上させるために来園者の行動を理解するという目的のもと、私は夜行性であり暗室の中でライトを使って観察するポトというサルを対象にした。自ら探し出さないと姿が見られないポトの展示は、来場者が入ってきて、「臭い」「何も見えない」「怖い」と30秒ほどで立ち去る人が多かった。その中でも、ガイドスタッフが居た際はポトの匂いや寿命に興味を抱いて質問する来場者が増え、一度姿が見えると「可愛い」と観察を続けてくれる人が多かった。途中から私自身もポトの居場所を伝える案内をしたところ、立ち止まる人が増えて嬉しかった。これらのことから、展示場にスタッフがいて案内することの重要性や観察環境を整えることの大切さが理解できた。少しの工夫で来場者の反応が変わることが非常に面白く、野生動物について学んだ知識を展示に活かすような取り組みを自分でもやってみたいと感じた。

その他に、集団で生きるサルの飼育では群れ作りが重要であることや、個体同士の相性がかなり大きいことを初めて知って驚いた。動物園は確かに野生に比べて空間は狭いが、来場者と自然を繋ぐ場や研究の場となっておりそれが保全につながるのだと今回の実習で理解できた。私は今後も動物園は、動物たちが快適に過ごせる工夫をしながら持続して欲しいと思う。さらに、動物園水族館を自ら研究で利用することでその意義を生かしていきたい。

6. その他 (特記事項など)

お世話になった日本モンキーセンターの皆様に感謝申し上げます。